

圖版要項

一 燉煌壁畫釋迦說法圖斷片（原色版） 米國 フォッグ美術館藏

豎 四六糎（一尺五寸一分）
横 六二・三糎（二尺五分六厘）

二 燉煌壁畫釋迦說法圖斷片

豎 最長 三七糎（一尺二寸二分）
横 二五糎（八寸二分）

同 藏

燉煌千佛洞からの絹本・紙本などの繪畫は、案外手近かに見られるが、壁畫は、殆ど彼地から搬出されてゐないので、一般には見る機が極めて少い。その最も纏まつたものは、オルデンブルグ氏の將來に係るもので、それはレニングラードのアカデミー附屬土俗博物館に收藏せられてゐる。點數は二十數點に過ぎないが、選擇頗る宜しきを得た駭くべきコレクションで、北魏から唐五代を経て宋初に至る迄のものが年代的に一通り揃つてゐる。この蒐集を除くと、あとは米國のフォッグ美術館（Fogg Art Museum）所藏の唐代壁畫三片が世に知られて居り、これは最近物故されたウォーナー博士（Langdon Warner）の手により、一九二三年（大正十二年）、該美術館第一次支那探檢の際に現地から搬出されたものである。

その三斷片の中、一片は千佛洞第一四〇窟（ベリオ氏編號）よりのもので、他の二片は第一三九A窟より切取られたもの、而して、本號收載の二圖は即ち後者二片であり、卷頭の原色版は大串純夫氏が昭和二十八年十二月、フォッグ訪問の際、親しく撮影した天然色寫眞の原板からの製版に係るもので、他の一圖（菩薩半身）は同美術館の好意により、その原板よりの寫眞を轉載した。なほ原

品からの詳細なメモが大串氏の手により作成されて居り、これ等の燉煌壁畫に於ける技法、特に著彩法の真相を明かにし得る事を、この上も無い欣びとするものである。

さて、この二片が、寶樹下釋迦像の左右に侍する諸尊像を描いた一部であることは、その圖様の端々から判斷し得る所であるが、この一集團が千佛洞第一三九A窟の那邊に存在してゐたのかを明瞭になし得ない。中尊を釋迦と見做すのは、諸尊の中に八部衆が認められるからに外ならぬ。二斷片は共に菩薩中心に截り取られてゐる爲め、生憎その上邊に位置する武裝諸像の頭頂部が失はれてゐるが、幸に、向つて左の菩薩（圖版第二）の光背に接して迦樓羅 Garuda の嘴が見え、それに對する菩薩（圖版第一）の後方には、三面を具有する阿修羅 Asura、並びに、有角の獸頭を冠する一尊（燉煌壁畫の八部衆には、他にもこの姿のものが存在してゐる）などが認められる所から、これ等が釋尊を中心に、左右四體づつ並んで八部衆を形成するものである事が判る。

千佛洞の唐代壁畫には、幾組かの八部衆が遺存してゐる。正面壇上の塑造釋迦像を中央にして、奥壁から左右兩壁にかけて、十大弟子や諸菩薩・四天王と共に、八部衆を描いた大規模なものが第一三八窟にある。（註三）同じく釋迦說法圖中に現れてゐるものに、第一三九A窟左壁のものがあり。（註四）（龍・阿修羅等）、第一〇四窟には、法華經變相中の釋尊の左右に、又、第一九乙窟には、塑造の涅槃巨像の足部に、第一四九窟には維摩經變相の中に、夫々八部衆が描き出されてゐる。（註五）これ等に於ける八部衆の存在が、夫々法華・維摩・涅槃その他の諸經典の所說に基くものである事は言ふ迄もない。

今ここに見るフォッグ美術館の壁畫に八部衆の見られる事は、唐代に於けるこの種の群像の流行を物語る一例として興味があり、上述諸例の状態から推して、この二斷片上方の缺失部分にも、龍・蛇・獅子・摩竭・靈鳥等の鳥獸冠が、

阿修羅・迦樓羅に混じて羅列し、奇怪な眺めを呈してゐたに相違ないのである。蓋し、壁畫としての規模の點に於ては論ずるに足らぬ些々たるものとは言へ、小圖の中にドラマティックな要素を見事に盛り込んでゐる邊りは、流石に大陸の壁畫である事を思はせる。なほ此の一團を組織せる諸尊は、說法釋迦像を中央として、左右均齊に配置された比丘像二、菩薩像二、八部衆、武裝の眷族二、執金剛二(第一圖の下方に設折羅の一端が見える)、總計十七尊の程度を出ないが、更に四天王その他が加はる餘地もあるであらう。

圖の構成は概略以上の如くであるが、この壁畫に於て最も注目すべきは、その描畫技法、特に精妍なる賦彩法である。勿論これは大量生産的に作製された壁畫であつて、唐代佛畫としては極く粗末な部類に屬する作品である事は言ふ迄もない。殊に、圖中過剰に漲る一種のどぎつさを我輩は厭ふのである。然し、それを厭ひつつも、なほ且つ其處に見る唐畫特有の精悍な筆力には、壓倒される思ひを隠すことが出来ぬ。

圖中諸尊の姿には、既に常套化された象形が認められ、特に菩薩の面貌姿態にそれが著しい。この點、先づ壁畫の製作年代が晩唐に接近してゐる事を示す。この時代になると、佛畫作製の技法が一通り練熟し、この壁畫に於ける諸尊顔面の描法も亦決して單純ではない。菩薩、比丘、天部の三種には、夫々の特色を生かすべき別々の描法が採られてゐる點を見逃せぬ。即ち、菩薩の場合は、濃褐色に塗つた上を朱線で輪郭をかき起し、上瞼は黒に、眉を紺に、更にその眉には青緑の線を添へる。そして、法隆寺金堂壁畫に見るやうな隈取りを施すことがない。比丘像の場合は、淡褐色の肌の上に墨線で鼻目その他を描き上げ、幾分あたりの強いその墨線の働きで、羅漢畫らしい枯淡な味を表さんとしてゐる。これに對し天部像には、闇褐色の下塗りに、更に強烈な隈取りを加

へ、以て顔面に於ける筋肉の隆起或は顫動を示さんとする意圖が窺はれる。

妍麗の一語に盡きるのは、その色彩であらう。中尊光背に於ける綵網彩色もさる事ながら、菩薩の胸や頭上を飾る金屬・寶玉の嚴身具は、光彩陸離、洵に眼の醒めるやうな輝きを示し、菩薩の綬帶及び比丘像の著衣等の布帛類に施した花文の色差しに至つては、全く思ひ掛けぬ情趣に戸惑ふ程である。

唐末の佛畫と言へば、得てしてわれわれは惰性で作られた無氣力のものを想ひ浮べるのであるが、爰に見る釋迦說法圖斷片に於て、幸にも唐畫の良き傳統が遺され、なほよく吾人の賞鑑に堪へるものである事を慶び、故ウォーナー博士の勞を多ししたいと思います。(松 本 榮 一)

註 1 The Bulletin of the Fogg Art Museum, XI, 2, Pl. 12 参照。

2 Mission Pelliot: Touen-houang, V, 302—304 参照。

三	"	"	V, 298, 299.
四	"	"	V, 301.
五	"	"	III, 187.
六	"	"	I, 63.
七	"	"	VI, 324.

三 東魏武定二年銘白玉半跏思惟像 東京 書道博物館藏

全 高 五四糎(一尺七寸八分)

四 北齊武平元年銘白玉半跏思惟像 某 氏 藏

全 高 三五糎(一尺一寸五分五厘)

五 北齊白玉半跏思惟像 某 氏 藏

全 高 三五糎(一尺一寸五分五厘)

——以上三一五 松原三郎「東魏北齊の白玉半跏思惟像について」参照——